

軍事史学

第51巻 第2号

巻頭言

戦争の記憶を絶やさぬために

木畑洋一

戦後七〇年がたった二〇一五年夏、第二次世界大戦をめぐるメディアの報道は例年よりも多かった。しかし、日本のこれからを担っていく若い人たちの間で、こうした情報がしつかりと受け止められているのかどうかについて、筆者は少なからぬ不安を抱いている。かなり前から言われていることであるが、第二次世界大戦で日本が米国と戦ったということさえ知らない者までおり、多くの若者たちは、日本が経験した戦争についての情報は自分にとって関係のないものと思っているのではなからうか。戦争の記憶とは無縁な世界の広がりである。

筆者自身、戦争直後の生まれであり、大戦についての直接の記憶はない。物心ついてから聞いた家族の話（四五年六月の岡山空襲の話が圧倒的に多かった）や、軍隊から戻って教壇に立っていた小学校や中学校の教師の話が、自分にとつての戦争の記憶の核となったと言つてよい。生身の人間の直接的な記憶を伝達されることによつて、間接的な形ながら戦争の記憶を育んでいくという状況は、今日でもなお存在しているが、大戦についての直接の体験、記憶をもつ人々は高齢化し、しばらくするとそういう機会はなくなっていく。

それに代わつて、本やメディアによつて提供される戦争の情報が、戦争の記憶につながる主要な手掛かりとなるという形になつてすでに久しい。しばしばそれは生身の人間を通じた記憶の伝達より強い衝撃力をもつが、それは受け手の側がそうした情報に積極的に関わつていこうとする姿勢を備えている場合のことである。そのような姿勢が、若い人々の間でますます希薄になつていくのではないかと、筆者には感じられる。

本やメディアを通しての記憶形成はメリットももっている。生身の人間が語ることは、戦時の苦しみや戦争のなかでの被害の側面に集中しがちであり、加害者としての経験は、たとえその人自身の体験のなかで大きな部分を占めていたとしても、語られないままにされがちである。筆者の場合も、戦線から戻ってきた教師から加害に関わることを聞いたという覚えはない。それに対し、さまざまなメディアでの戦争報道の場合、被害の側に重点が置かれ続けていることは確かだが、加害の面もある程度扱われるようになってきた。若い人たちが、加害と被害の両面にわたる戦争に関する情報に積極的に向かい合い、自分なりの戦争の記憶を育んでいく状況が生まれてくることが求められている。

（成城大学教授・東京大学名誉教授）